

私がチベットに行きたいと思うようになったのは霊体験を通じ真言密教に興味を持つようになった18才の頃からである。

そしてその願いが実現したのは35才の時である。

真言密教はチベット密教＝ラマの教の流れをくみ現在の形を成していると私は理解している。

そしてラマ教の歴史の中で多くの僧が育ち自らその歴史をつくり、継続してきている訳であるが、特に「ミラレパ」という僧の伝記を読んでから彼とラマ教に対し強い親近感を抱くようになった。

私にとって35才は人生を左右する大きな出来事が起こった時期でありチベットに行けば自分自身を再発見できるような気がしてならなかったのである。

そんな思いでチベットのある寺に訪れた時、偶然（私は必然であったと感謝している）に鳥葬の儀式が行われていた。

儀式は高い場所で行われており私からは少し見上げるという位置関係にあり、望遠レンズでその様子を見つめていた。

そこに一人の老僧が現れ、たどたどしい英語で私に説明をしてくれた。

「死者の体は内臓、肉、骨に解体されすべてこまかく砕かれており今からその儀式の担当の僧によって護摩がたかれた。」その白い煙は空高く一筋の柱のように登り始めた。

するとどこからともなく一羽の「はげわし」がその白煙の柱の根元をいつくしむかのようにはやさしく弧を描き始めたのである。

それは仲間に食事の準備が整ったことを知らせる合図であり多くの「はげわし」が次々と思い思いの弧を空に描き始めたのである。

そして徐々に高度を下げ地上に舞い降りると短い時間に食事を済ませ空高く飛び立ってしまったのである。

死者の肉体をより細かく解体することは、地上に一片の肉体をも残さないようにするためであり、それにより死者は「はげわし」と共に天に上りふんとなって地上に戻り肥として植物を育てそれを動物が食べるという輪廻転生に似た自然のサイクルに乗ることになるのだと僧侶は語った。

ここで私はひとつの疑問が解けたのである。

それはチベットのラマ寺院に行くと必ず經典と共に人体解剖の書がおかれていることであり、鳥葬をより完全なものにするためには高い解剖技術が重要であるということであった。

「お前はどこから来たのか？」との老僧の声に私はふと我に返った。

「日本です。」と答えると老僧は言った。

「この遠くまでやって来てくれたお前にその労をねぎらって話をひとつしてあげよう。」と。

「思うようにならない人生を悩むことは無い。『人生というもの、自分の思うようになら

ない。』ということの基本として生きれば何も苦しむことはないのだ。」

私の胸のうちの悩みを見透かしているかのように彼は続けた。

「お前は大きな声でオギャーと泣いて生まれてきたであろう。しかしお前の父や母、そして祖父母達は笑顔で迎えたはずであろう。

お前は泣いているのに周りの者は笑っている。ではお前の死の瞬間を考えてみよ。

お前が一生懸命生きて、その最後に良い人生であったと思い、安堵の笑みを浮かべようとしている時、子供や孫達は泣きながらお前の最後を見つめているものなのだ。」

「ようするに人生の始まりも終わりも、お前の行為と同じことをしてくれる者はいないということだ。だからこそ『人生とは思うようにならないものだということの基本として生きる』ことを学べば楽しい人生を送れるのだ。」と。

私は老僧に丁寧に感謝を述べ寺をあとにした。

帰り道を何度も老僧のことばを思い起こしているとふと疑問を感じたのである。

その疑問とは、「人生思うようになることもある。」ということである。

「思うようになった時どう考えればいいのか。」と私は考え続けていた。

老僧と会ってから1ヶ月が過ぎようとした頃この新たな疑問を解決することができた。

それは「思うようになった。」と思ったと同時にすぐ次の新しい目的や目標を設定し歩みはじめることになるので、ようするに思うようにならない人生という新たな旅がスタートすることになるのであるから、「思うようになった。」というのはほんの瞬間でしかない。しかし「思うようになった時」を確実に意識し理解することはとても重要であると私は考えていた。

そして私なりにたどりついた結論は思うようになった時には『ただ素直な心で感謝の気持ちをそれにかかわるすべてのものに表現する』ということである。

より早くより素直に感謝の心を表現することは新たな目的を明確にすることのできる最良の方法でもあると思うのである。

「人生思うようにならないことを基本として、感謝の心を素直に表現する。」最後までこの思いを大切に生き続けたいというのが今、現在の心境である。

合掌